

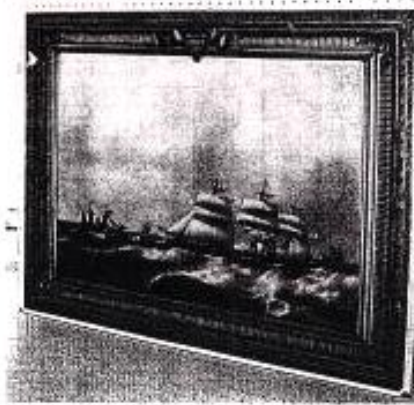
開陽丸21世紀

特別展

開陽丸と箱館戦争

乗組員が残したもの

開陽丸と箱館戦争
乗組員たちが残したもの



徳川幕府の旗艦・開陽丸は、明治元年十一月、江差沖で座礁沈没した。続いて救援に駆けつけた特選丸も座礁してしまった。一度に軍艦二隻を失い、制海権の維持に大打撃を受けたことにより、「暗夜に灯を失うが如し」と嘆き、戦意に多大な影響を与えたものと思う。

箱館戦争は翌二年五月に終結。それから百三十五年という節目の年にあたり、開陽丸友の会と開陽丸青少年センターの共催により、本年五月に特別展を開催した。

今回は「六人の関係者が遺した記録」をもとに実施したが、ご覧になれなかった方々のために、その主な内容を紹介したい。

榎本釜次郎



簡単な略歴
一八三六年生まれ、一八六二年開陽丸建造と共にオランダ留学、一八七五年千島・樺太交換条約締結後明治十一年シベリア経由で帰国、のち通信、文筆、外務大臣等歴任

榎本は、明治二年五月十八日降伏。軍大國事犯の送還というし、通達する道筋は大変な騒ぎであった。数百人からなる警護のもと、榎本軍の幹部は、「網張りたる籠籠に

獄中からの手紙
明治三年三月十六日(武陽一母、親月)

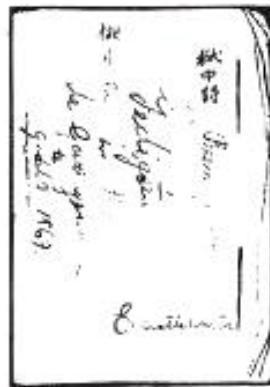
私儀是迄の艱難記等はとても御面会はず候はでは紙筆に尽し難く候。去下ら一語にて申上げ候へば衆に代し生命を棄て候段下道に背き候事これなく候間此の事御安心下さるべく候。御放免等の事はいつころや此の方にては相分り申さず尤も其の事をさまで欺き候理にもこれなく只々天命に任せし候

御母様
御親月院様

乗り、籠の鳥の思い」と、大島圭介は書いている。東京辰ノ口の兵部省顧問所に着いたのは、六月三十日で、暗い牢に投獄された。三十四歳であった。

発行所
・開陽丸青少年センター
・開陽丸友の会
北海道苫野町字堤神町
番〇三九五の五五二

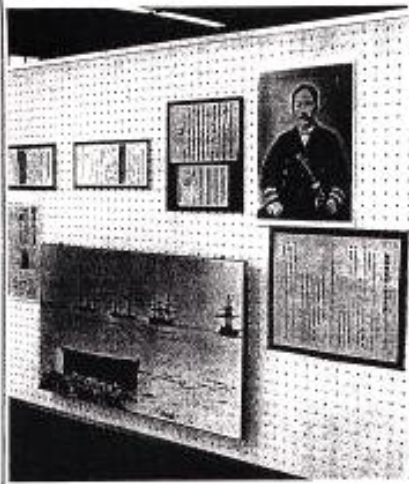
獄中詩



【写真は会館の榎本釜次郎氏提供】

監獄は、細長い教室のようには雑居房が並んでいた。榎本配下の者は、一房に一人ずつ入れられた。榎本はオランダ語で話しかけて、隣室には松立太郎、第二房には大島圭介、第四房には沢太郎左衛門が入牢している。

「日本のため、産業のため実行したいこと山のごとくあり」と。この獄中時に多くのことを記している。榎本は科学のこと、化学のことをはじめ、鉱物学、植物学など多種多様にわたり記録している。ローソクの製造法では、山漆の実から採るローソクは栽培した漆の実から採る蠟よりも白く、良質とか。牧草に暇がない。また、幕府で生活に困る者のために、鶏やアヒルを増やす職業や、じゃが薯から焼酎を造る製法、石鹼、テール油の製造など、これからの世の中で生きて行くために役立つ技術を紹介している。



沢太郎左衛門



簡単な略歴
一八三五年生まれ、長崎海軍伝習所に学ぶ、一八六二年オランダに留学、一八六八年開陽丸艦長として蝦夷地へ

○戊辰の夢 表紙写真
明治三十年 四月



大坂城に在った徳川慶喜公を警備のため、開陽丸は大坂湾に出動した。阿波沖で薩摩藩船との海戦は、この一度だけである。

艦長榎本釜次郎が將軍と打合せのため上陸、これと前後して將軍は夜陰に乗じ、開陽丸に救助を求め、直ちに品川へ出発するよう申し付けた。

艦長不在のまま出港は無理とする、副艦長の沢太郎左衛門との口論の模様に興味がある。次に、その一端を

板倉伊賀守・・・上様は早々に江戸へ帰城のため速やかに出帆せよと。

沢・・・軍艦は艦長の指揮に従うもの不在のままの出港無理。

板倉・・・尤もであるが、出帆は上意の沙汰なり。

沢・・・海軍には規則あり、船長の命令はもつとも重いと心得。

板倉・・・御前に出て何か評議する。

只今より軍士山丸艦長を、艦隊の指揮官とする。

沢は、江戸海へ航海中は艦長代理とする。

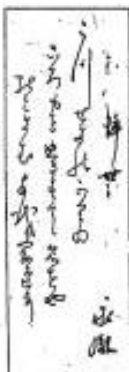
このじきじきの命に沢は、止むなく航海することになった。

中島三郎助父子



簡単な略歴
一八二一年生まれ、
ペリー艦隊来航時、浦賀与力として対接対応
一八五四年日本の洋型船・鳳凰丸建造、一
八六八年開陽丸で蝦夷地へ、箱館奉行所並に

開陽丸を失った中島三郎助は、箱館奉行並として千代ヶ岡台場の守備についた。徳川家の御恩に報いるため長男恒太郎(二十二歳)と二男英次郎(十九歳)とともに、この台場を死守する覚悟であった。
中島三郎助の辞世の句をはじめ、千代ヶ岡陣中日誌には当時の押し迫った様子を知らることが出来る貴重なものである。紙面の関係上ここでは、五月十日の日誌の最後を紹介する。



辞世
うつせみのかりのころもをぬきすて、
名をやのこさむ千代ヶ岡へに
永庵

五月十日 土曜日

合宿
今午(午後)十二時三十分より、隊長、柴田と當宿所二體在、不残他行いたし、第八時三十五分頃帰陣之事。
今夜第三時、五稜郭より書状到来、左三記ス。
明十一日、賊軍海陸二而襲来、函館江迫り候由外圍人より通達有之候二付、元一同覺悟之儀二者候へとも、猶守衛心を用ひ候儀、奉行衆より之沙汰、鈴木始三郎、申来候。

小杉雅之進



簡単な略歴
一八四三年生まれ、長崎海軍伝習所三期生、一八六〇年日米修好通商条約交換のとき成陽丸で太平洋横断、一八六八年開陽丸で蝦夷地へ、釈放後内務省出仕

小杉雅之進は、安政六年、成陽丸に教授方手伝いとして乗組み、日米修好通商条約締結の際、渡米している。また、開陽丸が品川脱出時には、軍艦として乗組み、蝦夷地に渡り、榎本政權時には江差奉行並として多くの箱館戦記、「兩窩記聞」をはじめ「芝罘録」同付図など、貴重な史料を遺している。



品川沖の軍艦の図

沖下の戦い

△蝦夷地の風景絵図から

箱館港を望む

鷹ノ木から駒ヶ岳を望む

大崎村近

情報ネット

KANSAI SUPER SHOW

アポロダージュ 接舷攻撃
2004年 7月10日・11日
会場 日本武道館

桑港にて
植松三十里 著
成陽丸の乗組員の記録(新人物往來社刊)
開陽丸青少年センター販売取扱

山内六三郎(のち提督)



簡単な略歴
一八三八年生まれ、一八六七年徳川昭武公に随行渡欧、一八六八年開陽丸で蝦夷地へ、弁天台場で奮戦、釈放後道内炭山開削等に尽力

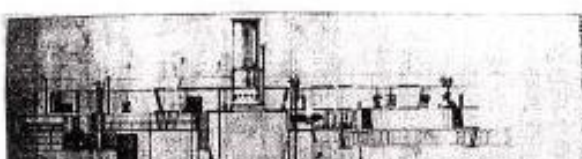
山内六三郎は、通訳方として榎本と行動を共にしていた。開陽丸が、品川沖で待機中に甲鉄艦から、ガトリング砲を開陽丸に撃ち込んだ。江差沖では座礁する直前まで、当番として勤務し、座礁時の様子を記録している。
この記録は、山内六三郎が八十歳の時、自叙伝として遺したものを同方会誌で紹介されているので、次にその部分を紹介する。

○甲鉄艦より開陽丸へ速射砲を積み替えた時の様子
「余が品川にありし時、屢々横浜に来往し、暗夜更艦に乗り、其の積載の速射砲始、銃器彈丸等を荷舟に移し、我艦に運搬せし事あり。」
○開陽丸座礁時の模様
「座礁の前迄当番なりしが、其頃より雪は粉々として降り、鈴木某と交代船室に入りて雑談中、忽ち地震の如き響きありて、船底礁岩に触れたり。」
○下陸後、榎本軍とともに五稜郭に帰陣する時の様子
「榎本等四・五名と共に、鷲越にて箱館に帰らんと山間の一軒家に泊せしが、雪益々盛にして、峠を越えるを得ず。終に本道に據る事とし、沿岸の風雪を犯し、レミントン銃を肩にし、松前を経て箱館に帰れり。」

岩橋新吾(のち教章)



岩橋新吾は、開陽丸に製図方として乗組している。箱館戦争に従軍し多くの絵図を書き遺している。



この図は開陽艦の断面図にして未だ見成図
~明治初年函館に説走前に毛筆にて製図~

簡単な略歴
1835年生まれ、1861年軍艦操練所絵図認方、1873年ウィーン万博に派遣

友の会会長 石橋謙雄 記